

# 松伏町の概要

## 9 松伏町の概要

### (1) 地理的環境

松伏町は、埼玉県の東端部、北葛飾郡のやや南に位置し、千葉県との境にある純農村の村々が併合を重ねてできた町で、昔はのどかな田園風景が広がり、透き通った小川の水がサラサラ流れる自然の豊かな農村集落から発展してきた町である。

当町の隣接市町は、東に江戸川を隔て千葉県野田市、南に吉川市、西に大落古利根川を境に越谷市、北に春日部市がある。中央部には南北に中川が流れ、豊かな水と緑に恵まれた東西4 km、南北7.5 kmと縦長な地形をした町である。

町の面積は16.20 km<sup>2</sup>で市街化区域が2.61 km<sup>2</sup>、市街化調整区域13.59 km<sup>2</sup>である。東京都心から約30 kmの首都圏近郊整備地帯に属している。交通機関は、鉄道施設が未整備なため、最寄の駅である東武伊勢崎線北越谷駅やせんげん台駅、東武野田線愛宕駅、野田市駅、JR武蔵野線南越谷駅（東武伊勢崎線新越谷駅）、吉川駅などに数多くのバスが運行され、バスは町民の重要な「足」となっている。

地形的には、町の北東部に標高14 m前後の金杉台地を形成しているものの、大半は、標高4～6 mの低地からなる水田地帯となっている。

### (2) 人口及び世帯数

昭和30年4月20日の金杉村、松伏領村合併当時の人口は、9,019人であった。10年後の昭和40年には9,308人とこの頃の人口増加率は低かったが、15年後の昭和55年の人口は18,793人となり15年間で2倍強の伸びを示している。

この頃は、当町に新しく住居を求める大部分の人は東京への通勤者であり、ベッドタウン化の傾向を示している。その反面、農業人口は、総人口の増加傾向とは逆に減少の一途をたどり、昭和40年は総人口の71.2%であったものが、昭和55年には25.8%と大幅に減少している。

また、町の人口は堅実に増加の下に平成12年には世帯数が9,000世帯を超え、平成13年12月に人口が30,000人を超えた。その後も本町の人口はゆるやかに増加していたが、現在は、減少傾向となっており、令和3年4月1日現在の総人口は28,725人である。

人口の構成比をみると、年少人口（14歳以下）10.6%、生産年齢人口（15歳～64歳）60.0%、高齢人口（65歳以上）は29.4%である。

#### 〔松伏町の人口、世帯数の推移〕（各年4月1日現在）

|     | H29    | H30    | H31    | R2     | R3     |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|
| 人口  | 29,989 | 29,788 | 29,374 | 29,053 | 28,725 |
| 世帯数 | 11,764 | 11,892 | 11,945 | 12,068 | 12,138 |

### (3) 歴 史

#### ア 原始・古代

当町の築比地地区は下総台地の西端にあたり、数多くの遺跡が存在する。旧石器時代にさかのぼる遺構、遺物などは確認されておらず、本郷貝塚で発見された縄文時代草創期の石槍の一部（約 10,000 年前）が最古の出土遺物である。縄文時代の松伏の大半は、縄文海進と呼ばれる海水面の上昇により海であった。わずかに残った築比地の台地の上には、本郷貝塚（縄文時代前期～後期）、浅間 東 遺跡（縄文時代中期）、栄光院貝塚（縄文時代後期）などに集落が営まれ、現在にその痕跡をとどめている。

その後、海岸線は次第に後退し、稲作が広まった弥生時代以降、次第に低地部にも生活の基盤を築いていったと思われる。弥生時代の遺跡は確認されていないが、古墳時代になると下香取神社西遺跡、前田遺跡、平安時代には本郷貝塚などで集落が台地上に形成されている。古利根川沿いの自然堤防上では遺跡は発見されていないが、集落が営まれていたことが推測される。

#### イ 中 世

鎌倉時代の松伏は下河辺荘内であったと思われ、現大川戸地区を下河辺荘に隣接していた大河戸御厨内に比定する説もある。大河戸御厨を名字の地とした一族が大河戸氏で、その居館が現大川戸地区内であったとする説もあるが、定かではない。大河戸氏については『吾妻鏡』より、その動向をある程度伺うことができる。源頼朝の挙兵当初、大河戸氏は平氏に与し、その後源氏に帰順するが、姻族であった有力豪族三浦氏の嘆願で頼朝から許されたこと、承久の乱（1221年）では一族から3人の戦死者を出したことなど、大河戸氏一族の名が散見される。

鎌倉時代後期になると、下河辺荘は金沢北条氏の所領となり、現赤岩地区は称名寺（横浜市）に寄進されている。

室町時代の様子は、数少ない古文書により断片的に伝えられるに過ぎない。現赤岩地区は称名寺領の赤岩郷として、15世紀中頃まで史料中に見られ、鎌倉時代から鎌倉の地と深い結び付きがあったことがわかる。無量寿院の地藏菩薩坐像（町指定文化財）は、その様式から鎌倉の仏師によるものと思われ、鎌倉とのつながりを物語っている。

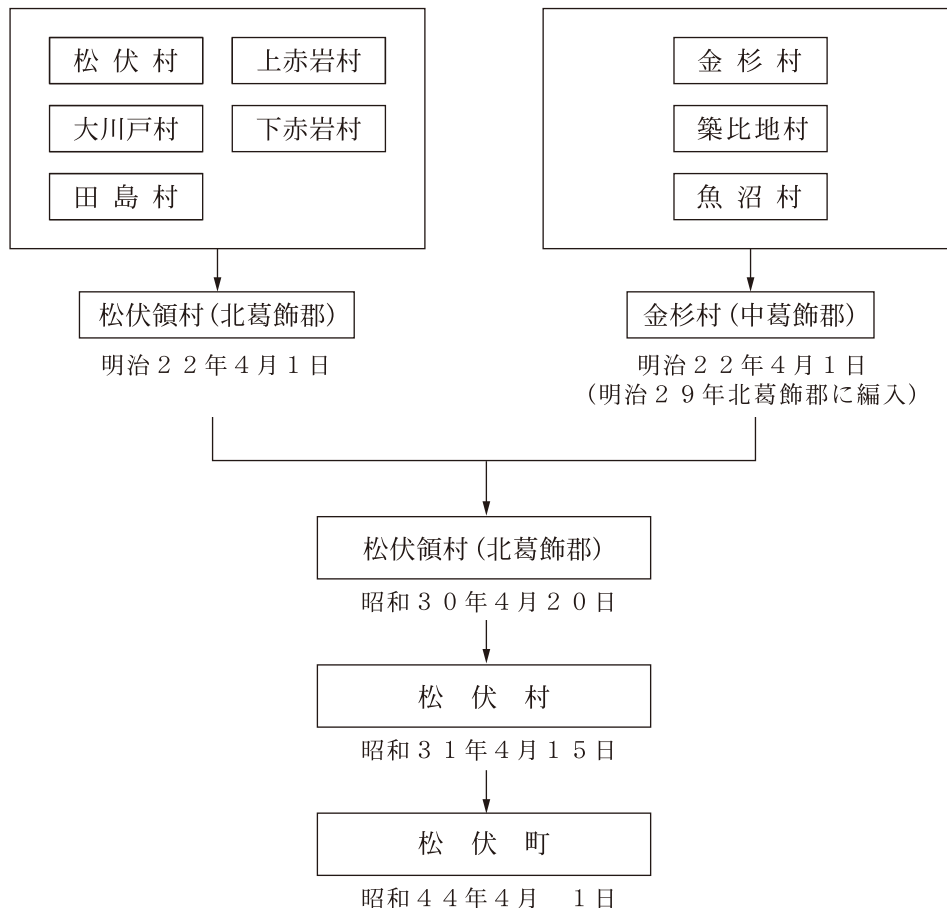
#### ウ 近 世

江戸時代には、松伏はほとんどが江戸幕府直轄地であった。江戸川の掘削や河川改修が行われ、土地の生産力を増大させた結果、新田の開発や現在の魚沼地区や田島地区が新たに立村された。このような時代背景のもと戦国時代末期、松伏に土着した石川民部の一族は、大規模な開墾を行った他、各地に多くの寺を開基し、仏教の興隆にも努めた。また金杉の飯島家は農民でありながら三代にわたって江戸川の改修に尽力した。金杉地区に残る「砥根河重疏碑（新利根川碑）」は、江戸川改修を記念して建てられた貴重な民衆の記念碑である。

## エ 近現代

明治初期の松伏町域は、金杉、築比地、魚沼、大川戸、松伏、田島、上赤岩、下赤岩の8カ村に分かれていた。明治22年（1889年）、金杉、築比地、魚沼3村が合併して、金杉村となり、他の5村が合併して松伏領村<sup>まつぶりょうそん</sup>となった。その後、昭和30年（1955年）に金杉村、松伏領村<sup>まつぶりょうそん</sup>が合併して松伏領村となり、翌31年には松伏村と改称した。

さらに、昭和44年（1969年）には、町制が施行され、松伏町となり現在に至っている。



### (4) 松伏の地名の由来

松伏という地名の初見は「本土寺過去帳」であるが、年は不詳で、戦国末期ごろと推測される。「マツフシ」、「松節」とも表記されている。

地名の由来は明確ではない。巷説では、石川民部が播磨国曾根天満宮の曾根の松の実生を移植し、それが伏せ松であったためとも言われる。この松は江戸時代に枯死し、その後植えられた松も見事な伏せ松であり「静栖寺のクロマツ」として町の天然記念物に指定されたが、昭和60年に枯死している。

伏せ松由来説の他に地形由来説がある。自然堤防地形を古語で「ブシ」と言い、古利根川沿いの「ブシ」に松が自生する風景からとする。こちらも明確な根拠はなく、由来の正確なところは不詳である。

(5) 町長・副町長・町議会正副議長・文教民生常任委員

| 職 名           | 氏 名       |
|---------------|-----------|
| 町 長           | 鈴 木 勝     |
| 副 町 長         | 鈴 木 寛     |
| 町 議 会 議 長     | 増 田 等     |
| 町 議 会 副 議 長   | 田 口 義 博   |
| 文教民生常任委員会委員長  | 長 谷 川 真 也 |
| 文教民生常任委員会副委員長 | 平 野 千 穂   |
| 文教民生常任委員会委員   | 高 橋 昭 男   |
| 文教民生常任委員会委員   | 増 田 秀 雄   |
| 文教民生常任委員会委員   | 砂 川 清 時   |
| 文教民生常任委員会委員   | 村 上 真 由 美 |

(令和3年4月20日現在)